

鞭牛さまのおいたち

文 中野 東禅

山深い里の日暮れは早い。夕餉ゆうげをすませ、おとなたちは、夜なべの藁わらしごとをひとしきりかせいだ。湯をのむころには、子供たちも寝しずまっている。

鞭牛さまは、ここしばらく、実家の佐々木家に逗留とらうしていた。

「伯父和尚おじさんは、まだ寝ねえみでだな（みたいだね）」と、とうさんはつぶやいて耳をかたむけるのだった。かすかに読経の声がきこえる。

佐々木家のおも屋の裏には、ほそい道をはさんで、ラントーと呼ぶ建物があった。

鞭牛さまは、暗くなると、ひとりでこのラントーにこもって草鞋わらじだの柄簀えざるを作るのを仕事にしていた。ときには、仕事の手を動かしながら読経していることもあった。

どうゆうわけか、鞭牛さまは、家の者と寝起きを共にしなかった。ひとりでラントーに泊まったが、昼間は家の者と一緒にかせいでいた。

子供を相手に「五文のローソクをともして、三文の徳を取れ」などと言いきかせるのだった。「ものを大切にするように、決してそまつにしてはならんぞ」と、たびたび話したものであった。

この鞭牛さまの生家は、いまの下閉伊郡新里村和井内である。

閉伊川は、盛岡の東十五キロほどの山地にある区界峠くさかいを源流として、まっすぐ東に向かって六十キロほど流れ、宮古湾にそそぐ水流である。

宮古の十五キロほど手前に茂市村がある。そこから刈屋川にそって北に向かってゆくと、十キロほどで和井内村がある。

岩手県は、西側の県境を奥羽山脈がさえぎり、東側を北上山脈がさえぎっている。その中間の北上川ぞいに、盛岡、花巻という穀倉地帯が南北にはしっている。

しかし、北上山地は巨大な岩石が地中からもり上がったような地形であった。それはそのまま、東の陸中海岸にまでせまって海におちこんでいる。

そのかたくけわしい地形が、何百年も、文明や政治の恩恵を拒否しつづけてきたのであった。

鞭牛さまは、宝永七年（一七一〇）に和井内村の農家、佐々木家に生まれた。

この村には宝鏡院という曹洞宗の寺があつた。お寺の和尚さまは村の子供たちの教師であつた。鞭牛さまは幼名を何といったかわからないが、百姓の子でも頭がよかつたせい、特に目をかけられて、宝鏡院で読み書きを学んだ。

まずしい山村で育つたが、少年鞭牛にとつても忘れられないできごとが起こつた。それは、九才のときに聞いた大洪水のことであつた。

閉伊川が洪水で氾濫し、川筋の村が全滅した。そのおそろしいうさは、刈屋川の増水の記憶とむすびついて、少年鞭牛の脳裡にあつた。

そして、十五才のとき、彼の祖母が死んだ。人間の死をまのあたりに見て、少年の心は死のおそろしさと生のはかなさを感じとつたのであつた。

青年になつた鞭牛さまは、かせぎに出ることになつた。その仕事は、鉾石運搬の牛方であつた。

ずい分と方々を歩きまわつた。

けわしい岩石の山道をのぼりおりするのは、牛方にとつても、牛にとつても苦勞であつた。雨がふればすべり、すこしの間、人が通らなければすぐに雑草が生いしげる山道では、心がいらだつことも多かつた。そんな時はひとり丘に立っていた。

深い山ではたらく鉾石掘りの家や、沢伝いに、わずかな畑をたがやしている人家が、山あい忘れられたように、静寂の中にしずんでいる。

見晴しの丘は、山に出入りする鞭牛にとつて、いつしかきびしい仕事を忘れる休憩の場となつていた。そこでみるものは、里から忘れられた人々の、貧しいくらしであつた。その貧しさはまた、鞭牛自身のくらしでもあり、和井内村の生家のくらしそのものであつた。

鉾石運搬の牛方の仕事は、けつこうかせぎになつた。鞭牛十六才のときには八戸領久慈に鉾山発見、十九才のときには甲子村で磁鉄鉾山が発見されていた。しかし、古い鉾山はおに掘りつくし、牛方たちも遠方へ行かなくてはならなくなつていて、先の見通しは不安だつた。

このころ、しばらく忘れていた天災がやってきた。鞭牛二十才の享保十三年七月、南部領は大豪雨にみまわれ、洪水による損害四万石、山崩れ五百カ所、家屋の流失百四十、橋の決壊は大小四百三十五を記録する惨事となつた。

翌年には盛岡に大火が発生し、二千戸を焼いた。が、すでに南部藩には財政能力がなく、民衆を救恤することができず、わずかに錢三百貫文を支出するにとどまつたのであつた。

その年、南部藩は坪役錢と称して、一坪につき二文の宅地税を課し、ここに庶民怨嗟の聲が野におこることになつた。そして、この年の南部藩は、二万石の大凶作となつた。

翌々年、鞭牛二十二才のとき、年貢、坪役錢の賦課に反対して、強訴の人々が蜂起し、

一揆は各地に波及はきゅうしていった。

そんな、騒然そうぜんとした中で、青年鞭牛は突然出家したのだった。

(つづく)